

報 告

西ドイツ社会体育・スポーツの現状

塩 崎 光 蔵

まえがき

私は西独社会の体育施策について現在進行中のゴールデン・プランの概略の知識を得ていたのであるが、本年春笹川良一氏を中心に準備中である、B&G財団の招聘で西独の黄金計画の立案者であり推進者である、アーベル・ベック氏*の訪日により、西独の黄金計画の出発から実施に至る間の詳細が判り、且つベック氏の日本に対するアドバイスを聞き、愈々日本も今すぐにも問題の分析とこのような計画と実施に踏み切る時が来たことを痛感したので、差し当りなんとかして西独で実施中の黄金計画をこの目で見て、その社会的背景や既に建設済みの施設の幾つかでも見学して来たい希望を持つに至ったのである。幸いにもミュンヘン・オリンピックを機会に西独社会体育状況視察研究旅行の計画を知り、而かも研究旅行の目的が西独だけにしぼられたものであることを知り我が意を得た喜びに早速これに参加することにしたのであった。然し本報告は紙数の関係上十分な見聞記をものする事が出来なかったが、いくばくか諸賢の参考ともなれば幸甚である。

1. 西独戦後の社会的背景と黄金計画

西ドイツ連邦共和国の総面積は日本の面積の約3分の2の広さであり、人口は6,000万である。その有効面積は、70%以上（日本は30%）が曠野であり、森や丘である。緑とスポーツは無縁ではないように思われて先づうらやましく

思った。

ドイツは第二次大戦敗戦による国土の荒廃はひどく、その上に東西ドイツ分割の悲運に逢い、これはドイツ民族にとって大きな精神的打撃であったことは言うまでもない。然し技術革新と国民の努力により奇蹟的復興と成長を遂げ、国民生活の安定速度は早く、労働時間の短縮と自由時間の増加、主婦の家庭からの解放、レジャーブーム等々のプラスの面が出た。一方技術革新、経済高度成長の歪も顕著になって現われ始めた。即ち人々の運動不足と体力の低下、不健全な商業娯楽の抬頭、青少年問題、過密過疎の問題、公害、労働の細分化と単純化、自然の破かいと人間疎外、人間性その失が叫ばれ、これに対して「人間性を取戻そう」「歪をなくそう」と云う声が大きくなった結果、1955年から1959年にいたる間に問題に対処するための研究グループが出来て、問題分析と一般市民への説得と宣伝が実施され、そして1960年に、ゴールデン・プランの発表となったようであった。

儲からぬスポーツ

これらの背景の下にドイツは「何を国民に提供したか」それは前述の黄金計画であり、国民総スポーツの振興である。国家的事業として、スポーツ振興に国民のエネルギーをこれ程までに燃やしていること、又、資本主義体制下において、「儲からぬスポーツ」に対し、これ程莫大な投資とエネルギーを集結している事実は驚異の他ないと云わざるをえない。ここに我日本

* 当時ベルリンにあったドイツ体育大学（現ケルン体育大学）で恩師カール・ディム先生の下で体育哲学専攻、1952年ドイツオリンピック協会専務理事、55年から5年間準備して、ドイツゴールデン・プランのプランナーであり推進者である。

と西独の差が出ていると思う。戦後の社会的背景だけの日独対比は全く見分けのつかないと思うほど、両国の事情は共通した面が多いと見るが、その後の問題において、愈々大きな格差の出ていることに注意しなければならない。

2. 西独の目覚めの速やかだった事

1. 西独におけるスポーツに対する考え方。

スポーツは余技ではない。

スポーツは人々の生活に根ざし、「スポーツは人生の伴侶である」、「スポーツは教育である」、「スポーツは望ましい社会集団の場である」と言う考え方である。従ってスポーツは彼等にとって「余技ではない」のである。

2. 西独独スポーツクラブの歴史と伝統

西ドイツスポーツの伝統はドイツ体操の「ヤーン」(1778~1852)以来、国民ギムナスティックは、地域社会の「スポーツ・クラブ」の歴史と伝統を持っている。これがドイツ・スポーツ・体育の拠点となって居り、単にスポーツの場であるだけでなく、社交場としてコミュニティ形成の大きな役割を果たして来ている。従来、西ドイツに於いては、スポーツが地域社会の場で行なわれて来たが、それは「スポーツ・クラブ」の発展がその要因であった。日本の体育・スポーツが学校体育を基盤として発展して来たのとは対照的である。そして、その「スポーツ・クラブ」に対する人々の愛着と親近感はスポーツに対する基本的な考え方と共に我国では到底想像もし得ないものがあるのである。自己の所属するスポーツ・クラブを、その施設を、より大きく、より立派なものにしたいと言う熱意が、当然、クラブの施設や運営を理想に近づけ、全国に数多く設置されて来たと言えよう。又逆に言えば、地域に密着した「スポーツ・クラブ」が広く国民のスポーツに対する関心を高め、スポーツ活動を活発にした要因の大きなものとなっているわけである。子供達は物心ついた年齢には、彼等の生活日程の中でスポーツ・クラブに自然に親しみ、少年から青年、成人へ

の成長をスポーツ・クラブの中で過ごす。そのような例はめずらしくなく私もこの目で見て来た。西ドイツのスポーツは、スポーツ・クラブをぬきにして語れない。否むしろ、スポーツ・クラブを理解することが、即西独体育スポーツを理解することだと言うことが出来る。「黄金計画」はそのスポーツ・クラブの施設を、もっとも住民の要求に適したものとして建設しようとするプログラムだし、「第二の道」を始めとする国民スポーツ振興も、スポーツ・クラブ根拠に展開されているのである。「第二の道」とは、「総ての国民に、健康で、豊かな生活を営むためのスポーツを」が西独「第二の道」の目的である。これは記録や勝利をひたすら求め、一定の水準以上にある少数の「エリート」達が懸命にトレーニングに励む、競技を専らにしたスポーツ、即ちエリート・スポーツが「第一の道」だとすれば、それに対し、自由時間に生活を豊かにするために、そして体力と健康を培うべく、多くの人々が親しむスポーツ活動を「第二の道」と言うのである。それは広く幼年から老年までのすべての国民を対象としたスポーツ、みんなのための「国民スポーツ」だと言えよう。

学校体育はおくれていると言ってよい

そしてこのスポーツ・クラブの発足は前述のように学校体育より早く始まっていて、生活や地域社会に大きく根をおろしてきていた。従ってドイツの学校体育は、どちらかと言えば「不十分である」のは当然かも知れない、が然し最近では、学校スポーツを充実することが、クラブ・スポーツの発展にも又「第一の道」にも通ずることであると言うことから、学校のカリキュラムについてもこれを改訂する機運が強く、第一、第二の道のバランスにおいても、学校体育と、スポーツ・クラブの発展のバランスも急速になしとげられるのではないかと考えられ、我国スポーツ・体育の施策に対する他山の石とすべきではないかと考えさせられる次第である。

斯の如くに、西独ではスポーツを人々の生活

や地域の次元に位置づけて来たが、これは人々の自発性、自然発生的に生れ育ったものである。所が第一次大戦以後ナチスの抬頭による全体主義的統制と国家管理下におかれ、スポーツの在るべき本来の自主的、自発的であるべきスポーツに大きな打撃を与えたのであった。又敗戦によるスポーツ組織の荒廃、スポーツ施設も戦災に逢い、しかも戦後の再建ではスポーツどころではなかった。即衣・食・住・水道・下水道・道路等公共施設の建設に目が向けられ、スポーツ施設はおくれた。その組織の再建も以上の状態で非常に困難にぶつかったのである。然しながらドイツ体育・スポーツの伝統は根強かった。経済復興が進むにつれて漸やく、スポーツ競技会が各地で行なわれるようになった。そして1948年スポーツ団体の再編成、組織が始まり、1950年バイエルン州のユースホステルに於て「ドイツスポーツ連盟（体協）」が結成され、市町村から州へそして連邦の組織へと発展して行ったのであった。勿論これらは全く自主的、民主的組織として成立発展して来たことは言うまでもない。

「青少年はオリンピックを目指して
トレーニングをする」

ドイツのスポーツの特徴の一つとして「オリンピック精神をめざす」、それとスポーツに対する基本的な考えとして政治・宗教的にあくまで「中立」を堅持すると言うことである。スポーツに対する彼等の純粋性を顕現していると言えるわけである。以上の信念の下に「オリンピック精神」の尊重を目指し、近代オリンピックの持つ精神の尊重こそスポーツに親しむ人たち及スポーツ界のバックボーンとなっている。それがスポーツによって求めうる「最高のもの」と言う意識が、スポーツの中立を守らせ、それを可能にしていると言えるのではなからうか。その効果として「青少年はオリンピックを目指してトレーニングをする」と名づけて全国青少年大会が行われている。これは真実の「オリンピック至上主義」であると言えるのではなからうか。又これによって若い戦後のスポ

ーツ・マンの奮起がもたらされたと言ってよいと思う。

3. 西独における自治意識

西独の人々の自治意識の根強さは次のような所からよく察知出来ると思う。

(1) 政治体制が連邦共和国で強固な地方自治によってなされていることが第一にあげられている。

(2) 市町村及州は文字通り自治体として「住民のための機関」であり、「町のことは町で」の在り方が政治・行政に筋が通っている。即ち財政の自治専重は勿論、連邦政府はそれぞれの自治体の連帯と総合的サービスを常に考えていて、このような政治の在り方が西独における体育・スポーツ組織やその活動の背景として存在することを考えておくべきである。又国からの補助と施策に頼る傾向がなく、あくまで自治体の責任に於いてなされている。ゴールデン・プランに基づく施設建設の要求が市民から為政者になされ、自治体予算の都合では、市民が之を融通すると言う提案が出されることがよくあると言う有様である。（然し税財政の仕組が日本とは大きく違っている）このような自治体の強固の一半には財政力の強さがあるわけで、人口5千の村で大体3億の規模で、これは日本のそれと比べると約3倍であると言われている。かくして補助金を当てにしない、唯市民は自治体の予算が市民生活にプラスの面に有効に使われているか否かに強い関心を持っているのである。

政治家はスポーツマンである。

(3) スポーツと政治の好ましい関係の成立。政治と行政は「援助はするが指示はしない」と言う好ましい関係である。それは多くの自治体の「首長、政治家がスポーツマン」であり、多くのスポーツマンが政治家であると言うことがスポーツに対する深い理解にもつながっていると云える。吾々が色々な市町村で懇談する時、このような状態をよく読みとることが出来て気

持ちがよかった。唯口でスポーツ政策を雄弁にしゃべるのとは全く感じがちがうと言うことを体験出来たのは収穫であり、おどろきでもあった。

(4) 市民は国家統制、政治的圧力に対して強い拒否反応を示し、「金は出すが口は出さない」、指示命令は絶体に出さないと当局者が言明しているのであった。又富国強兵とのつながりは断固として否定している。これは西独スポーツの伝統の重さや、ヒットラーの苦い経験からであろうと読みとれると言うものである。

(5) 学校についても、学校は「自治体のもの」、「市民のもの」との認識強く、実際施設にしても元々クラブが所有していたのを学校に貸していたので、要するに学校だけの施設はなかったと言えそうである。

3. 西独黄金計画の紹介

最初に、黄金計画は「西ドイツオリンピック協会」（日本のスポーツ振興資金財団に当る）即民間競技団体が提唱したと言う特徴を持つものであって、1960年ローマオリンピックで世界に発表した、「工業化時代を迎えるドイツ人の健康のために全土に網の目のようなスポーツ施設を」と15年計画で、これに投資する資金は7千億と言うプランから始まったことを知っておく必要がある。

(1) 西独では人民福祉上、自然破かいに対処しなければならないと考え出したのは1955年頃からであり、そこで早速研究に着手したと言われる。西独ルール地方は日本の大阪地区のような所であるが、此の地区に危険徴候が出て、その結果これは非常に危険であると認識するに至ったと言う。早速前記小チームが作られ問題を分析したと言われる。1957年初めて「黄金計画」を発表し、1961年に漸やく実施に移ったわけである。そして本年を含み12年間に工事や運動施設関係で、建築費だけで1兆2千億円を投入したと言われている。ここで建築費だけと言うのは、土地代を含まないと言うことで、それは西独の地価は安く日本の地価の10分の1であ

ること、地方自治体の所有する土地の利用、民間の土地を得るためには、公共施設土地収用法と言う法律で規制されているのできわめてたやすく手に入ること、都市では早くから都市計画設計が出来ていると言う条件も手伝って、問題とするほどの費用がかからないと言うことからであると言う話して全く吾々にとっては羨ましい条件であると言わなければならない。

(2) 黄金計画既設の概況

発足以来、12年間の産物としては、2万1千の体育館、2千の屋内プール、1万の運動場、2万1千の子供の遊び場となっている。

(3) 黄金計画出発に至るまでの努力

このような大計画を実施に移すまでの苦労は並大抵ではなかったようである。

このような計画を進めるには国民全体の理解と認識を必要とする所から、それには、政治家、企業家、医学界、市民全部が一致し、認しきの一本化即世論の一致がなければ、そう簡単には進むものではない所から、数多くの手を打たねばならなかったと言われる。その1,2を紹介すれば、マスメディア……新聞、雑誌、TV、ラジオで毎日宣伝し、又選挙にも効果的に利用しなければならないと言うので、当選しそうな候補者の説得即ちこのプランは絶体必要なのだと言うことをその候補者の行政方針の中にいつも掲げてもらうよう努力したと言っていた。次に非常にむづかしかった企業家の協力が得られたこと、彼等は何故賛成するに到ったかと言うと、きわめて簡単な動機からであったと言われる。即ち「いくら工業が発展しても人間が滅亡してしまつては何にもならない」と言う具合であったと言う事である。次に西独医学界の協力である。一年半と言う歳月を使って、増加する心臓病や高血圧など循環器系統の「成人病」の56%が運動不足病によるものであると実証し、西独における全体の病人の80%が運動不足によるものであると証明したと言うことである。強力でしかも適切で、タイミングのよい協力であると言わなければなるまい。

- (4) 黄金計画を内容的に見ると次のような事柄から成立っているように思われる。

即、次の三つの柱に分けて考えることが出来ると思う。

第一は都市及其周辺の施設建設である。

技術革新による工業化の「其の技術を人間性回復技術として使う工夫」が必要であるとベック氏は強調する。その例としてケルン市の施設について紹介すると、長期休暇とか保養のための施設については、荒廃化した地域をどのように甦らせ美しい自然の景観をもつ保養地にするかの問題である。ケルン市地区はかつて工業、石炭の鉱山のあった所、廃坑の荒地を非常に汚染した河川からフィルターを通して浄水装置で水路をつけ大きな人工湖を作った。そこにたくさんの樹木を植えつけて自然を甦らせた。この地区は広く、そこには、国民に必要な休養、保養施設が全部そろっている。そこでは水遊び、ボート、ヨット、モーターボート、それから全く人嫌いな人には、森の中に入って都会の喧噪からのがれられると言うような風になっている。つまり「休暇のためのパラダイス」と言うことである。「現在の高度な技術を以てすれば、このような「パラダイス」やスポーツ施設が立派に出来ることを考えるべきだ」とベック氏は力説する。ここには宿泊施設も整っていて一家揃って休暇を楽しむことが出来るようになっている。次に市街地の施設については、高層化したそして多種目のスポーツ、遊戯が出来るように設計したスポーツハウスを数多く作ることが望ましい、但し新鮮な空気の供給がなされなくてはならない。其の上交通は時間を多く要しないと言う絶対条件付で作るべきであるとの事である。又レクリエーションのみならず他の機能も兼備するようにしなければならない。工夫と技術を以て、若い人から年寄りまで、皆んな、楽しく集まり合える「タマリ場」のような所にしたい。勿論、若い人のダンス場、感じのいい喫茶店、浴場も必要であろう。尚スポーツ・ハウスは4つか5つのタイプで作ることが大

事で、プレハブ式等出来るだけ簡単にした方が良くベック氏は助言している。

第二は人口の小さな町村の施設建設である。私の視察したマインツ市近郊の「ニーダ・オルム」村の黄金計画を紹介すると。この施設はゴールドデン・プランによる屋外プールセンター型である。屋外プールセンターと言っても、屋内にも立派な、華麗なプールが設けられていた。ほんとうに美しい壁、水、付帯施設に先づ見とれた。外は一群のプールとその周辺の緑の広場とに分かれている。広場は水の表面積の約10倍の面積がそのまわりの付帯施設及緑地に当てられなければならないと言うシステムになっていると聞いた。屋外の一群のプールは、飛込プール、競泳用の50mプール、非泳者に対する広い浅いプール、子供の水遊び場と言う風に一面がプールであった。周辺の緑の芝生では、陸上競技のような激しい運動でなく、バレー・ボール、バスケット・ボール等気軽にすべての人が簡単に参加出来るようになっている。広々とした緑の芝生をいろいろな形で利用している有様の優雅な光景にしばしうっとりとして見とれたものであった。前記屋内のすばらしいプールは深さを変更出来るプールで、プレスによって、ボタン一つで上下移動可能な、即子供の時には水深を1m以下にし、成人使用の時には1m80位の深さとすることが出来る、所謂マルチファンクション（多重機能）を一つの機能に持たせると言うものである。ここでは又別にサッカー場テニス・コート、他のいろいろなスポーツの出来る体育館もあり、きわめて美しい、完備した施設であった。

第三には学校の施設とスポーツ・クラブの施設のかみ合せ型である。

それについては前述のように、自治体の自治意識から生れたものであるが、私の視察した代表的なスポーツ・クラブはキール市の郊外にあるクロス・ハーゲン市（人口1万2千位の小市）にその例を見ることが出来た。概ね、学校は高等学校まで午前中授業である。（朝7時から45分授業で6校時の仕組）。午前中は学校が

クラブの施設を含めすべての施設を自由に使用する事が出来、午後から夜にはスポーツ・クラブの人々がすべての施設を利用してスポーツを楽しんでいる。又学校の児童生徒は自由意志でスポーツ・クラブに入会して午後から夜に至る間各自楽しいクラブ生活にひたることが出来る仕組みで、その数も年々増加の一途をたどっている。このように実にうまくかみ合った状態であった。このような学校、クラブのかみ合わせ運営を奨励するため、黄金計画において力を入れ援助を惜しまないと言うことであった。

ここで始めて3才～5才の幼時と母親の遊戯やマット・平均運動を見学することが出来たが、誠にほほ笑ましい光景であった。その他少年少女、成人、老人に至る迄、歌とスポーツと休養と懇談のクラブ生活に、3泊4日のクラブ員の家での会員の自主的申し出でによる民宿を送ることが出来、又ドイツの家庭も拝見出来た事と、民宿2日目の午後から夜10時迄クラブハウスに於てドイツスポーツに関する懇談と議論の場を持っていただき、一生の思い出に胸深くしまいこんで参ったことは何よりの土産であったと言えよう。

以上、大きく分けて3本の柱を中心に黄金計画は実施されつつあると考えてよいと思うわけである。

4. 西独黄金計画と日本の施策について

1. 今春B&G財団準備室招聘によるアーベル・ベック氏の我国になされたアドバイス。

ベックさんのアドバイスの主なものを拾い上げ列挙することとする。

(1) 日本の工業化又それによって起る弊害が世界先進国の水準に比して極端に悪化し、これを露呈している。これは日本民族にとってきわめて危険であることを正しく認識すべきである。

(2) 子供の遊び場及人間らしい生活を保持するための条件を確保するために「建築法規」の大改訂を必要とすること。

(3) 日本の既存のスポーツ施設の程度は国際

先進国に対して25年ないし30年おくられていることを考慮すべきこと。

(4) スポーツに於いても、国家的視野に則って進めるべきであること。

(5) テクノロジカル・ヒューマニズムについて考えなければならない即工業化の技術水準は非常に高いが、体育・スポーツ、レクリエーションに対する技能水準は驚くべき低劣さであること。技術は人間尊重のために使う必要があることに目覚めなければならない。これによってスポーツ施設産業も充分可能であるとの事。

(6) 過密都市からの工業化の分散と人間性回復施設の飛躍的増設を急ぐこと。

(7) 一般世論、意識構造の転換について

ベック氏から見れば民族の危機意識が余にも見られない、感ぜられない所から、意識構造の転換をさげられたと受け取るべきであること。

(8) 吾々はこのアドバイスを充分参考にしてこれからの日本の対策に臨むべきであると考え次第である。

2. 戦後の国民の健康と体力について

戦後我国経済高度成長の蔭には多くの歪がもたらされたことについては最近強く指摘されて来ているが、中でも国民の健康がむしばまれ、体力の低下が実証されている。昭和41年度の厚生省発表では、日本人の1日の被医療者数は600万人と言われ、その医療費は年間約1兆3千億に達していること、その後の被医療者数は45年度推定で1日800万人を超え、国民の8%が病院通いをしていることを報告している。これは国民の14名に1名に当るもので、その医療費も2兆5千億に達し、年間1人当りの主食費の約2倍になると言われる。高度経済成長による国民所得の増大、医療費の漸増等を考慮に入れるにしても、余りにも驚異的数字であると言わなければならない。

そもそも疾病の重荷は、肉体的、経済的に止まるものでなく精神的にも痛ましい限りと言わなければならない、特に青少年の欲求不満と体

力の低下は放置出来ないものがあるが、これは要するに国民生活全体にバイタリティの退化と言う新しい事態が発生したと考えるべきである。このまま進むと日本は21世紀にどんなことになるかを考える丈に恐い事である。

昭和36年発足のスポーツ振興法以来「スポーツの日」、「体育の日」制定など国、地方自治体、体協等諸関係団体の努力にも拘わらず国民の健康は悪くなる一方である。今からでもおそくはない上記の原因究明と決意ある措置に全力をあげなければならない時であると思うのである。ところで、不健康、疾病の原因と考えられるものには産業公害、都市公害等々数多くあげられるが、なんと言ってもその中心となるのは工業化社会の運動不足があることは間違いない。

過去の間人生活には生きるために重労働をやって来た。この身体運動で生体の諸器管は自然な生命のリズムをうちつづけて来た。今その運動がなくなった。即異常な交通機関の発達で歩くことが非常に少なくなった。子供の遊び場所もない、老人たちの憩いの場は勿論、成人のスポーツ、レクリエーションの場が少ない等従って国民の身体は機能的バランスを失して精神異常寸前に迄追いこまれていると指摘されている。又これからの勤労者の余暇も増大が約束されているが、これに対応する施策不足は不安材料のみである。これは人々の運動不足を運動実行によって補う以外に方法はない。即ち「生涯体

育」の理念に基いて、赤ん坊から百歳迄1億総スポーツをめざす以外にない。以上のような国民の健康と体力増強に関する対策も具体的にいろいろ考えられるが、差し当り現在の国民の健康回復増進と体力向上について1億国民の認識・理解の徹底を如何に進めるか、国民の自主的盛り上りに如何なる策を用うべきかについて、吾々は機会を捉えて熱心に討議して来たのであった。最近、漸やく政界、経済界、マスコミ等に大きな関心が示されるようになった。即高度経済成長政策から人間尊重の方向に転換のきざしが見えて来ている。又笹川氏を中心とするB & G財団**の発足も近いと言われている。この機会を捉え研究と対策の樹立に向って全国民の意志統一を図り計画の実行に踏み出すチャンスでもあると考えるのである。今や西独ゴールデン・プランの成果が評価の対象となり且つアーベル・ベック氏訪日による対日アドバイスも受けた。吾々は条件を大きく異にする西独への追随は不可能かも知れない、然し之を充分参考にし、日本の条件に相応わしい対策の樹立に邁進する時であると確信するものである。

参 考 文 献

厚生省統計。毎日新聞記事。日本スポーツ少年団「明日のために」。B & G趣意書。同西独アーベル・ベック氏記者会見記。

** 笹川良一氏を中心に発足しようとしているもので「いつでも」「誰でも」好きなスポーツを、という「青い海と緑の国土計画」であり、20年間に3千億円の投資を予定した団体である。

The Present Circumstance of Social Sports in West Germany.

Kōzō SHIOZAKI

In 1961 the West German Olympic Committee published a golden plan and is carrying out the plan. The golden plan spends seven hundred billion yen on filling up the facilities of social sports from 1961 till 1976. Twelve years have passed since the plan was carried out first. This plan aims at having such a rendezvous or a social club as people, young and old, men and women all alike are able to spend their time taking physical exercises or chatting pleasantly. According to this plan West Germans will have not only the facilities of sports but also the various facilities of a club house to make use of their spare moments.

I stayed in West Germany from August 15 till September 15, 1972 to participate in the Munich Olympic Games and improved this occasion to observe the situation under the golden plan in many places of the country. In this treatise I report this observation and I hope that this is a good guide to taking a measure to meet the situation of Japan in future.